
死んだように生きている

百瀬まみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死んだように生きている

【Nコード】

N8589B

【作者名】

百瀬まみ

【あらすじ】

死んだように生きているひとは割と多い。このひとも、わたしも、えっ？あのひとまで。ひとはそんな生き方を死に生きと呼ぶ。かも。

杉村隆雄の死に生きの場合（前書き）

死んだように生きているライトな人からヘビーな人まで。連載だけどオムニバスの構成です。あなたの生き方とリンクする人がいたりするかもですね。

杉村隆雄の死に生きの場合

この世の中、死んだように生きているひとは割と多い。

そんな生き方を「死に生き」と呼ぶ。かも。

杉村隆雄の死に生きの場合

「超眠い・・・昨日は一睡もしてないから朝一授業は辛いよ」

「何？オンラインゲームもやってた？」

「はっ？ゲームですか？そんなんもう何年もやってない。いややらせてもらってないよ」

「なんだよ。やらせてもらえないって？・・・！！ああいとしの彼女の冴子ちゃんか！！」

「いやまじきついわ・・・携帯の出会い系のサイトに飛ばした履歴見ただけで浮気だ〜って夜中じゅう泣き叫ばれた。

大体、まだ結婚もしてないのに浮気ってなんだよ！まじ疲れる。」

「いいじゃん。冴子ちゃん美人だし、お嬢様だし。。。まっ！もてる男の悩みはつきないっことだな」

「いやまじありえないっの。。。」

ボクは杉村隆雄。K大学商学部4年生。普通の大学生だ。

普通に就職して普通の大人になり普通の結婚をして普通の幸せを送ることがボクの夢だ。

普通の人生か！ちいせーなっ！と馬鹿にする大人たちもいる。

いやいや普通のハードルをクリアすることは極めて難しい。

ニートやフリーターがうようよいて、毎日殺人事件にあふれていて、普通でいられることは一番幸せだ。

現にうちの8歳上の兄は「バンドをやって豪邸に住んでやる！」と19の春に夢を追いかけて大学も行かずに家を出た。

今ではすごく立派な派遣社員になっている。

母親が「派遣社員と言っても実際はフリーターというんだよ隆雄！」と言ってお風呂場でよく泣いていた。

可愛そうな母親にそっと新品のバスタオルを用意してあげた。

そんな状況を見ているので夢への無謀な暴走は危険だと理解した。

ボクはその夢のとおり普通に生きてきた。彼女と同棲するまでは

・

いま毎日死んだように生きている。ボクの死に生き歴は1年。

ボクが死に生きになった原因はズバリ彼女だ。

彼女とは2年間同棲している。

彼女は冴子ちゃん。同じ大学の3年生。

美人でかわいくて、素直で頭が切れてお嬢様だ。

いやだつたはず。。。

でも同棲1年で冴子ちゃんが美人でかわいくて、素直で頭が切れてお嬢様は

鬼畜で般若で、怒りっぽくすぐ切れる平凡なお辺土様となった。

ボクはあまり口が達者ではない。が、冴子は口が達者だ。とにかく怖い。まくしたてる。怒り出すと聞かない。嫉妬深い。

正直もう好きでもなんでもない。

愛してもいない。

般若のようなあの顔を見て以来、可愛いとも思えない。

一緒に住むと情がわく。といったのは誰だ。全くわからない。

殺意さえ覚える。

どうか別の人を好きになってくれ！とも願う毎日だ。

先日もけんかの際にもう別れよう的な話しをしたら大変だった。

「だまされた」「最低の男」と罵倒された挙句に暴力まで振るってきた。

正直疲れている。

最初のうちは応戦したりしていたが、最近では疲れて黙っている。

しかし、黙っていれば黙っていたで

「なに黙ってんの？卑怯もの！！」と発狂されたので5回に1回は返事をするようにした。

「いや」「そんなわけではない」などと答え縦でもなく横でもない曖昧に首を振るといふ

曖昧な返事をする小技を習得した。

そうすると早く終わることも体得した。

彼女は大学を卒業したら結婚を考えている様子だ。

卒業したら逃げようかとも考えた。

でも、間違いなく責任問題を振りかざしてくる。

悪い男になって逃げようかとも考えてみた。

そんな考えを起こしてちょっとニヒルに笑った夜は決まってナイフ

を持って追っかけてくる冴子の夢を見て飛び起きる。

夢なのにおしっこちびりそうになっていた。

至極情けない。

非常に冴子が怖い。

くだらないことだ！と友だちは笑った。

逃げ場を失ったボクは自殺まで考えたこともある。

でも、ひよっとしたら、明日には冴子が別の男を好きになるかもしれないと

いう喜びに満ちた妄想をして断念した。

「昔は好きだった同棲中の彼女をいまは愛せなくなりました。

ではボクはこれにて。。。ドロンさせていただきます！（ねた古っ

！）
」

たったこれだけの言葉を発することが出来ずに悶々としてる。

ボクは勝手で、最低で、浮気もので卑怯者なんだ。

そんな人間失格のレッテルが怖いのか？

いやそういうわけではないが、現状から打破できずにいる。

まさに心境はSOS！

家にいるときはとにかく冴子が発狂してほしくないあまりに気を遣う。

学校も同じなので見張られていて息抜きもできない。。。

見たいテレビも見たい映画も、やりたいことも出来なくて高笑いすることもなく。

ただ、ご飯を食べて空気を吸って冴子のご機嫌をつかがって生きていくだけ。

こんなボクの毎日は死んだように生きている。

杉村隆雄の死に生きの場合（後書き）

読んでいただいて感謝です。作者であるわたくし百瀬まみです。名前からしてAV女優か？キャバ嬢か？と想像されても構いませんが、本人は真摯な気持ちで活字と取り組んでおります。よろしくお願ひします。

内田桜子の死に生きの場合（前書き）

この世の中、死んだように生きているひとは割と多い。今回の死に生きさんはちょっと>ピーです。

内田桜子の死に生きの場合

内田桜子の死に生きの場合

「保護者会の出欠表は持ったの？」

「わかってるよー!!」

7月の暑い朝、じりじりとした湿度で着替えたばかりのTシャツがもう汗ばんでいる。

温暖化で環境問題も少し気にして申し訳ないと思いつながらエアコンの設定温度を低めの23度にして、わたしは健一郎に声をかけた。夫とは5年前離婚した。いまは長男健一郎と二男健太と犬のけんしろうの3人と1匹で生活している。二男の健太はしっかりしているのでこんな注意を促すことほとんどない。長男の甚六とはよく言ったのもので、長男健一郎は忘れ物が多いため、つい口うるさくなってしまう。

健一郎は電車で1時間ほどの学校までの道のりをバイク登校している。バイクは危ないので買うことはすごく反対した。が、コンビニのアルバイトで必死にためていたお金で買ったので仕方なく許可した。我ながら甘い親だと思う。

わたしも近くの不動産屋で10時から4時まで仕事をしていた。あわただしくドレスサーの前で口紅を塗っているとふと不安になった。健一郎は「わかってるよ。」と言っていたにも関わらず、机の上には用紙がしれっと淋しそうに放置されていた。

「やつぱり忘れてる。不安の中!!全然わかってない!」
提出期限が今日までだったのであわてて

「健一郎・・・?」と名前を呼びながら居間を探していると健太が「お兄ちゃんは今もう学校に行っちゃったよ。」と返事をくれ、健太の登校を握手して見送った。

朝は「行ってらっしゃい」と言いながら玄関で手を握ることを日課

にしている。握手することは嫌がる時期もあつたが最近では、諦めたのか「どーよ？」とか笑いながら、強く握り返してくれる。健一郎は17歳でもまだ、子どもだ。あどけない表情で八重歯を見せながら笑う仕草は小さいころから全然変わらない。息子たちの少しずつ大きくなる手を日々感じ、あどけない笑顔を独占している瞬間は幸せで満ち溢れるひとときでやめられない。口には出せないけど、心の中で「愛してるよ息子たちよ」といいながら握手をする。そんな朝の家族のコミュニケーションはスクールカウンセラーの先生の提案だつた。二男の健太が小学5年生のとき不登校になりかけたからだ。原因はよくわからなかつたが、夫と離婚して不安だつたのかもしれない。1週間朝学校に行く前に必ずおなが痛い。というので学校に問い合わせるとカウンセラーの先生にこの方法をすすめられた。握手や抱きしめたからと言ってすぐに登校拒否気味が治つたわけでは無いが徐々に学校に楽しく行けるようになっていった。それ以来一日も欠かすことなくこの日課を遂行している。

わたしは息子たちが可愛くて仕方が無い。娘時代の私は一人っ子でわがまま放題してきたのに、自分以上に大切な存在がこの世にあることを知り幸せのMAXを感じ息子の存在を感謝している。

こんなことはしてられない。わたしも仕事だつた。と思ひ出して父母会の用紙は1日くらい待つてくれるだろうと机の上に置き直してそそくさと出勤した。

午前9時30分。

後もう少しで会社に到着する寸前に携帯が鳴つた。スピッツの着うたが流れている。人ごとに着信のうたを変えているので音を聞いただけで健一郎だとわかつた。

「父母会の紙のことでしょ？」と健一郎の声をまたずにまくしたてると、

「内田健一郎さんのお母様ですか？」という中年男性の声だつた。スピッツのうた「健一郎の声」という条件反射に慣れているので、違

う人の声がすると耳が拒否反応を起こしてこわばっているのがよくわかった。

「はい。そうですが？」と答えると電話の中年の男性が「墨田区江東橋警察のものですが、息子さんがバイク事故に遭われました。現在病院で処置にあたっています。詳細はまだわかりませんが、渋滞です。病院はあけぼの病院です。よろしいでしょうか？」と冷静に話している。

次の瞬間体から筋力がなくなっていた。

私の記憶があるのはここまでだ。

ここから今日までの記憶が全く無い。

今日は何日で何曜日だろう？

わたしは何日食事をとっていないのだろうか？

わたしは死んでいるのか？生きているのか？わからない。

ここはどこだろう。仏壇のある和室の井草の匂いがある。

そんな自分の気持ちに気がつくことが生きている証拠なんだろう。

健一郎は死んだのになぜわたしは生きているのだろうか？

そして、わたしは日ごと、分ごと、あの朝の出来事を思い出し後悔している。なぜ「いつてらっしゃい」の握手をしなかったのか。朝の握手は「気をつけてね」の意味を含んでいる。

わたしが殺した。

わたしが息子を殺してしまったのだ。

あの朝までは確かにわたしは幸せだった。もう別にわたしは生きている価値などない。死んでしまいたいと思って泣きくずれているところに実家の母が入ってきた。

「あんたね。泣いているのは勝手やけど、あんたの子どもは一人じゃないんよ。健太もおるんよ。こんな風に廃人同然で健一郎が喜ぶかね？」と福岡弁訛りでまくしたてられた。殴られそうになり、顔を背けると健太があわただしく入ってきて、殴る手を止めてくれた。「おばあちゃん、やめて！おかあさん。ボクは大丈夫だよ。でも死んだりはしないで、生きていてくれたらそれだけでいいよ。」と弱々しくでもことば尻は力強くこころの中に訴えかけてきた。

健一郎が6さい健太が4さいのときにうまくいっていなかった夫と毎日のように夫婦喧嘩をしていると

「ままなかないで ままのことはぼくたちがまもってあげるよ

けんいちろうとけんたより」

と覚えたてのつたないひらがなで2人で手紙をくれたことを思い出して泣きくずれた。

生きていこう。健太といっしょに生きていこう。

それから数日後、健太が学校に行く。わたしは、ふらふらの重い足をひきづって健太と握手をしてひきつってはいたが笑顔を見せた。

健太が握り返してくる。違和感を感じて健一郎の姿を探し、いないことに気づくとまた落胆するといった感情を繰り返している。でも、健太をひとりにはさせられない。頑張って生きていかなくては。

結局、わたしは今日も死んだように生きている。

内田桜子の死に生きの場合（後書き）

読んでいただいて本当にありがとうございます。これからもよろしく
お願いします。&評価をいただけたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8589b/>

死んだように生きている

2010年10月13日17時34分発行